
日本におけるロシアのインテリゲンチヤ

— ミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフの生涯と創造 —

エレオノーラ・サブリーナ著

滝波秀子 訳

1943年7月16日、雑誌『東方評論』の中心メンバーであったミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフは、心臓発作のため大連で不慮の死を遂げた。44歳であった。稀にみる才能の持ち主の数奇な生涯であった。彼は1899年にザカスビ海州のメルヴ市で生まれた。1918年にチタのギムナジウム卒業後、チタ陸軍士官学校に入る。1920年に陸軍少尉に任官し、アタマン・セミョーノフの依頼によって日本軍事使節団との交渉にあたる将校に任命された。同年にチタ陸軍士官学校で学びはじめた日本語をより完全なものにするために、日本に派遣されたのである。

ミハイル・グリゴリエフは1939年まで東京で過ごすことになるが、1921年から1930年まで陸軍士官学校、参謀本部、拓殖大学でロシア語を教え、1928年からは北樺太石油会社にも職を得て、教師活動と兼務していた。

1939年に M. II. グリゴリエフは南満州鉄道株式会社（以下満鉄）の社長室付出版部の一員としてハルビンに移り、そこで発行されたばかりの『東方評論』に精力的に参加する。翌1940年には『東方評論』の仕事を続けながら、日本語および日本学の教師として大連ギムナジウムに移った。雑誌の幹部は次のように評価している。

「卓抜した日本語の知識をもつ M. II. グリゴリエフの協力は、極めて価値あるものであった。彼にとって後天的に得たはずの知識は、その国に生まれ育ち、文学の分野において専門の教育を受けた人々と肩を並べるほどであり、しかも文学以外の各分野にわたるものであった。」

そのようにして彼は幸運にも優れた文学的天分と豊かな知識を活かし、石油会社の仕事を続けながら、なおも日本の作家の作品のロシア語訳にとりかかった。

選集『東方へ』は1935年東京で出版されたが、芸術的作品の典型ともいべきグリゴリエフの翻訳が載せられている。彼の天賦の才能は輝くような成長を遂げるのであるが、とはいえそれは『東方評論』に寄稿していたわずかな間だけのことであった。彼の同僚たちは次のように思い出を語っている。

「まる4年のあいだ彼は翻訳編集の部門をまかせられていたが、物語の内容だけでなく、原作の精神までをきわめて正確に表現し、推敲を重ねたロシア語の訳文は素晴らしいものであった。とりわけ彼の翻訳は日本の中世の色調、あるいは日本の地方や村々に残された独特な言いまわしをロシア語で伝えたいという、本質的な志をもっていたのである。私たち読者によく知られているように、M. П. グリゴリエフは、すばらしい芸術的素質と能力でそれを成し遂げたのである。」

ミハイル・ペトローヴィチは日本語を完全にマスターしたといわれているが、それがすべてではない。彼は日本の自然そのものを、その言葉の魂を、日本民族の芸術的素質を、その国民性を、生活習慣と文化を理解していたのだ。と同時に、東京に住みながらグリゴリエフは母国語であるロシア語そのものの表現力を深めることも心がけた。このことは彼の日本語と日本文化の知識に独特な価値を加えた。彼の翻訳は彼が名文家であり真の芸術家であることを知らしめた。

グリゴリエフの残していった文学遺産のおかげで、日本人の思考や、感覚や、信仰の世界についての知識をもつことができる。学校の生徒たちへのテーマとしては、夏目漱石の『坊ちゃん』、石坂洋次郎の『私の鞆』のなかの《Sの話》の一部、岩田豊雄の長編『海軍』の第一章などにその反映がみられる。惜しいことに、ミハイル・ペトローヴィチの早すぎた死はこの長編の完訳を不可能にした。子どもや若者たちのためには志

賀直哉の『小僧の神様』、室生犀星の『蝶』、芥川龍之介の『蜜柑』などの作品を翻訳している。舟橋聖一の『木石』や川端康成の『高原』に、ロシアの読者は、日本人の感覚と様々な人間のタイプを読みとるのだ。

4年のあいだ『東方評論』は、日本の作家の気質と独創性に明白な認識をあたえられる素晴らしい作品を、卓越したセンスで選んだ M. II. グリゴリエフの翻訳に大きな誌面を、ときには半分も割いている。私たちはロシアの文学作品が日本で広く読まれていることを知っている。もっとも知られている作家としてはトルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフ、チエホフをあげられよう。数々のグリゴリエフの翻訳からいえることは、日本人がロシアの古典にいかに大きな関心をよせているかである。そのようにして、罪と精神的光明との境界に真実を探し求めているロシア心理主義文学派は、自分の支持者を日本で見つけたのだ。たとえば、菊池寛の『恩讐の彼方へ』はそのような文学のタイプの優れた典型である。自分の主（あるじ）を殺してしまい、その果ては盗賊にまで身をおとし、最後は自己犠牲的に人々に身を捧げるサムライの物語を読み、ひとりでにレフ・トルストイを思い浮かべるのである。芥川龍之介の『地獄変』（わが国では『地獄の苦しみ』という題で知られている）の主人公はドストエフスキーの登場人物に近い。絵師良秀は、かけがえのない娘への愛情もおさえこむ創造的情熱の犠牲となってしまう。

M. II. グリゴリエフの翻訳活動の最盛期は戦争と結びついていたので、日本人の愛国的風潮を反映した作品の選択に従わざるをえなかった。芹沢光治良の『眠られぬ夜』、尾崎一雄の『N中尉への手紙』などである。ミハイル・ペトロヴィチは『東方評論』で小説だけでなく、宗教、哲学、美学のテーマにも取り組んでいる。日本人の世界観を知るのに良い資料としては、谷崎潤一郎の『陰翳礼賛』、友松円諦の『日本人の死の考え方』があげられる。

M. II. グリゴリエフの歴史小説のロシア語訳の文体は大変すばらしいものである。それは額田六福の『大楠公』で、主人公は戦いに敗れた後醍

嗣天皇の側近の正成であるが、なによりも義を尊しとした武将は壮烈な非業の死を遂げる。また山本有三の中編『不惜身命』の主人公は將軍秀忠の従者のサムライで、喧嘩っばやさに目をつけられて政治家に転身し、軍の指揮官となる。またたいへん面白い作品として菊池寛の『笑ひ』がある。“無実の少年”光之丞の死についての物語である。將軍秀忠の遺体を守る不寝番のとき、笑みをもらしたという罪をさせられ、軍の最高責任者の命令で自ら命を絶つのだ。光之丞は仕事の功績と一族への配慮で一段階罰を軽減され、つまり自分の手で腹を掻き切ることになるのだが、特に読み応えのある場面は、その起訴状の翻訳にある。

もちろんミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフの活動は上記の作品で尽きるものではなく、彼の死後のこされた文学遺産は多様で並外れたものである。「もしもロシアと日本の貿易の進出の始まりがラクスマン、シェレホフ、レザノフで、政治的にはプチャーチンであるならば、それまで未知の分野であった日本文学への浸透は、グリゴリエフから始まったのだ。」という『東方評論』の編集スタッフの意見に同意せざるを得ない。

4年という歳月にミハイル・ペトローヴィチは多くのことをやり遂げたが、それが何十年でなくてわずか4年であることを考慮にいれるならば、わずかな仕事しか残し得なかったと言えよう。突然の死は彼の文学活動を中断してしまった。満鉄出版部の同僚のエヴゲーニイ・アガポフは大変あたたかい文章を残している。

「ミハイル・ペトローヴィチは我々に日本文学を紹介し、それによって偉大な隣国の民衆の認識と理解を容易にするためにのみ、仕事をしたのではない。ミハイル・グリゴリエフは我々のなかに住み、絶えず我々と接触をもち、彼の周りにいた我々は、日本と日本人についての重要な知識を少なからず彼から汲み取ったのである。そればかりでなく、ミハイル・ペトローヴィチは疑いもなく、真面目に日本語を学ぼうとしている多くの人々の教師であり、弟子たちはこの分野で積んだ知識を世に問うための最初の試みに、彼の助けを求めて駆けこむのだった。そしてあらゆる場合に、

知識や経験のみならずミハイル・ペトローヴィチの個性は絶大な役割を演じたのである……最後となった年、ミハイル・ペトローヴィチは出版部の仕事のほかに、大連ロシアギムナジウムで日本語と日本学を教えた。日本の美しさや日本人の勇敢さについて、巧みな名人芸をただよわせた語り口でロシアの少年たちを魅了し、日本と日本人への愛を彼らに呼び覚ますと共に、彼らがロシア人であることに誇りを持たせたのだった。そのようにして少年たちはグリゴリエフその人を愛せずにはいられなかった。」

同時代人の評価によれば、グリゴリエフは子どもたちだけでなく、亡命した大人たちにも愛されていた。日本の女性と結婚し二人の娘をもうけた彼は日本の社会に深く根を下ろしていたが、ロシア人社会から離れたりしなかった。亡命ロシア人たちに障害となったいろいろな問題の解決に、日本人からみて身内同然のミハイル・グリゴリエフの存在は、大きな助けとなり、あたかも非公式の全権大使のようであった。そして実生活の面では友であり、援助者であり、弁護士であり、ロシア文化の伝統を守る手本とされていた。

1920年代から30年代の日本でのロシア語図書市場の制約と乏しさにもかかわらず、グリゴリエフは膨大なロシアの図書の収集に成功しており、これは彼の誇りであった。それらの本は東京の彼の家のすべての壁を占めて、余った本は日本の本と一緒に数段からなる書棚をふさいでいた。東京からハルビンに居を移すときは満鉄出版部の臨時の図書室へ運び、それらの本を利用できた亡命ロシア人たちは、申し分のない蔵書構成であったと回想している。ロシアの古典、ほとんどすべての同時代の詩人たち、貴重な多くのソヴィエトの出版物、そしてもちろん大量の日本学の本があった。まことにミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフの生涯は特異なものであった。革命によって未知の世界に放り出された多数のロシアの将校たちと同じように、彼は異国での生存競争の厳しい試練をうけ、新宿の映画劇場のオーケストラで働いて日々の糧を得て（すぐに彼はチェロ奏者から指揮者になる）、そしてやがて大企業の仕事についた。チタ陸軍士官学校出

身でセミヨーノフ軍のうら若き将校は、名の通った地位を手にし、日本語と日本文献に通暁した人としてひろく認められ、日本研究者となったのである。日本文化を身につけたグリゴリエフは、ロシアの読者に分かり易く日本を紹介することをめざし、文学的素質をその仕事に完全に費やしたのであった。専門家にはよく知られているように、翻訳の仕事は簡単なものではない。明快な言葉でつづられた文体のなんと優雅であることか、言葉と表現をえらびだすその独創力と、ロシアの生活習慣には無縁である出来事をロシア語で伝える才能には、魅了されずにはいられない。グリゴリエフはロシアの読書界に日本の詩情を優れた作品群で紹介したのだ。芸術的に優雅に、日本の魂と、日本の文学の美しさをロシアの読者に親しませたということは、誇張といえないであろう。

ミハイル・ペトローヴィチの満鉄出版部の同僚や友人たちは彼がどのように翻訳に磨きをかけたか、いかに天賦の才能に恵まれた人物であったか、さまざまな興味ある証言をのこしている。

チタギムナジウムで、そのあと陸軍士官学校で1915年から1920年までグリゴリエフと共に学んだグレブ・モロゾフは、思い出を次のように語っている。

「中学生グリゴリエフはたいへん謙虚で、格別に学業には厳しく、いくぶん孤独な性格でしたが友達にはとても信頼されていました。士官学校でミーシャ・グリゴリエフは、砲撃の優秀な理論家でも実践的訓練に優れた者の一人で、十分な功績により剣帯付士官候補生の懸章を与えられました。これはめったにない出来事です。優秀な戦闘訓練のベテラン将校のように、我々の士官学校で剣帯付の称号で表彰されるのは陸軍幼年学校出身者でも稀なことで、《文官》—《元ギムナジスト》のなかで称号授与者は、たった二人であったのです。」

運命は20年の間二人を引き裂いた。そしてグレブ・モロゾフが職をえたさきは、ミハイル・グリゴリエフが精力的に協力してつくりあげていた満鉄出版部であった。

「わたしは上層部に推薦してもらうためにハルビンの《ヤマト・ホテル》に出向いて行ったのです。ドアマンに名詞を渡すとわずか2、3分で応接室に通されました。出版部長の野崎さん（訳者注・故野崎韶夫早大教授）とならんで背の高い好感のもてる紳士が立っていました。——そして野崎さんと事務的な話し合いのあと、30分後にはミーシャとわたしはもうレストラン《ニュー・ハルビン》に座っており、過ぎ去った日々について、我々の青春時代について、夢中になって話しあっていたのです。」

二人の友人は1939年から1943年まで満鉄出版部で働いていた。グリゴリエフの死後グレブ・モロゾフは次のように書きとめている。

「ロシアを去ったとき実際のところまだ青二才で人生にまともにぶつかったことのなかったミーシャは、なぜか、わたしの若い記憶には経験豊かな、人々の信頼を背負う姿としてのこっているのだ。最後の日々まで彼は文句なしに理想家であり、なによりも美しいもの、優雅なもの、高邁なもの、の賛美者であった。それゆえに美しい文学や音楽への献身にあふれ、最高の社会秩序の理念を希求し、また物質的要求そのものを満たすには控えめであった。そういう性格ゆえに、ときとして何かに過度に熱中し、また、深い信仰心を培ったのかもしれない。」

ドミートリイ・サトーフスキイ＝ルジェフスキイはミハイル・ペトローヴィチと陸軍士官学校の同期生で、彼の人々にたいする驚くほどの世話好き、誠実さ、善意さを心にとめて、次のように考えている。

「文学者、日本語の翻訳者になって、ミハイル・ペトローヴィチは自分の資質にあった活動の場を見つけたのだ。たしかに、文学は、彼の生きる使命となったのだ……翻訳者としては彼は確かに並はずれていた。彼の翻訳には、文学的才能のほかに、疑いもなく、美しい言葉の知識と、日本の文化と生活習慣に対する繊細な理解が表れていた……彼は日本とロシアを文化的に近づけるすぐれた活動家として、有名で素晴らしいラフカディオ・ハーンに劣らぬあらゆる素質をそなえていた。」

早稲田大学の講師であったアレクサンドル・ワノーフスキイはミハイ

ル・グリゴリエフと『古事記』の翻訳で二年間の共同作業をしていたほど親しかった。ワノーフスキーの思い出は次のようなものである。

「彼にとって『古事記』や古典文学はさらに広い企画のための前奏曲となるべきもので、そのことについては一度ならずわたしに話したものであった。彼は、しかるべき時代の芸術作品のなかから挿絵を添えた日本の歴史の物語を書きたいと考えていた。もしかしたら彼の頭の中には日本の歴史を背景にした文学史の構想があったのかもしれない。とりわけ最晩年には詩的才能が誰の目にも明らかに現れていたのだから。」

セルゲイ・シャフマートフはミハイル・ペトローヴィチとともに上海で文集『門』の出版に加わり、また挿絵入り週刊誌『フェニックス』でも一緒にはたらいていたが、自分の同僚について非常に心あたたまる思いを述べている。

「ミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフは天賦の才能に恵まれたばかりでなく、稀にみる労働能力の持主でもあった。彼の内面は気高く、心やさしい資質をもっていた。いつも穏やかで親しみがあり、彼を必要として助けをもとめてくる人には誠意をもって手を差し伸べていた。グリゴリエフの心は、彼の弾くチェロのように響いていたのだった…のびやかに、やさしく。」

ワルワラ・ブブノワがミハイル・ペトローヴィチと知り合いになったのは、満鉄で出版された『日本のおとぎ話』の仕事のときであった。ブブノワが挿絵を描き、グリゴリエフが翻訳をうけもったのだ。

「彼はロシア語の文章の批評を求めながら、私を自分の翻訳の仕事に引き入れていったのです。しばしば私の意見に同意しましたが、翻訳の文体や語彙に対する自分の視点はゆずれませんでした。こうした小さな仕事でも明らかなことは、ミハイル・ペトローヴィチは原作の精神へ照応するロシア語の表現を探りながら、注意深く接したということです。」

しかしもっとも興味深いのは、おそらく翻訳の仕事について語った彼の言葉であろう。それは『東方評論』の同僚であったヴェーラ・イヴァシケ

ヴィチが翻訳活動の第一歩をはじめるときに受けた彼の思い出を、鮮やかに述べたものである。

「ヴェーラ・アナトーリエヴナ、あなたはこの難しい翻訳業を手探りでやっていた私と同じ誤りをしてますね。センスのない言葉使いにならないために形だけの原作への歩みよりを固執しないで下さい。日本の小説の主人公がロシア語の翻訳のなかで生きていくようにして下さい。ただそのとき翻訳がこしらえものにならないことです。しかるべき等価語を選びだし、たとえそれが逐語訳と一致しないとしても、怖れないでください。自分の仕事を愛してください。そうすればあなたは目標に達するでしょう。」

ミハイル・ペトローヴィチ・グリゴリエフの人生航路は特異なものであった。彼はロシアに生まれ、日本で死んだ。彼の祖先はロシアにあり、子孫は日本にある。彼の活動は二つの民族の、二つの文化の、日本とロシアのインテリゲンチヤの架け橋となったのである。

ミハイル・ペトローヴィチは崩壊と暴力の嵐に覆われた感覚を背負ってロシアから逃れた。当然のことながら彼の追い求めたものは、祖国の幸せのためになるかもしれない貴重なものを、日本の生活のなかで見つけることであった。民族間の架け橋になりたいという彼の夢は現実を離れたものでなく、そうなることができる時代の到来をひそかに待ちのぞんでいたのだ。彼が素晴らしいものをたくさん持っていたことは同僚や知人たちが証言していることだ。翻訳の才能、学者としてまた社会活動家としての素質、傑出した労働能力、思考の広さと独創性、稀にみる記憶力、そしてたいへん重要なことは自己にたいする厳しさであった。未来を動かす人であった。二つの大なる文化を結び合わせる夢を追う人であった。

《M. П. グリゴリエフのロシア語翻訳・論文リスト》

9. サプリナ、滝波秀子 作成

古事記

Древнейший памятник японской литературы “Кодзики”. (На востоке)

芥川 龍之介

蜘蛛の糸

Паутинка. (На востоке)

山鴨

Вальдшнеп. (На востоке)

地獄変

Событие в аду. (книга)

蜜柑

Мандарины. (книга)

谷崎 潤一郎

陰翳礼賛

Похвали тени. (Восточная Обозрение. №1 '39. окт.-дек.)

麒麟

Чи-лин. (На востоке)

石川 啄木

マカロフ提督の思いで

Памяти адмира Макарова. (На востоке)

M. П. Григорьев

日本の旧詩・新詩について

Несколько слов о старой и новой поэзии Японии. (На востоке)

近代詩について

Новые поэты Японии, стихотворения. (На востоке)

日本の顔

лик Японии. (На востоке)

川端 康成

高原

Плоскогорье. (Восточное Обозрение. №7. '41. апр.)

- июнь)
- 菊池 寛 恩讐の彼方に
По ту сторону мести. (книга)
笑ひ
Смех. (Восточное Обозрение. №4. '40. июль-сен.)
- 尾崎 一雄 N中尉への手紙
Письмо к поручику Н. (Восточное Обозрение. №7.
'42. июль-сен.)
- 額田 六福 大楠公
Дай-Нанкоо. (Восточное Обозрение. №2. '40. янв.
-март)
- 石坂 洋次郎 私の鞆
Листки из портферь. (Восточное Обозрение. №9.
'41. окт. -дек.)
- 志賀 直哉 小僧の神様
Божество мальчугана. (Восточное Обозрение. №4.
'40. июль-сен.)
- 谷川 徹三 日本人のころ
Душа японца. (Восточное Обозрение. №1. '39. окт.
-дек.)
- 友松 円諦 日本人の死の考え方
Воззрения ниппонцев на смерть. (Восточное
Обозрение. №10. '42. янв. -март)
- 寒川 光太郎 緑の世界の杯
Чары зеленого мира. (Восточное Обозрение. '43.
июль-сен.)
密猟者
Браконьеры. (Восточная Обозрение. №3. '39. апр.
-июнь)
- 夏目 漱石 坊ちゃん
Барчук. (Восточное Обозрение. №14. '43. янв.
-март)
- 室生 犀星 蝶
Бабочки. (Восточное Обозрение. №9. '41. окт.
-дек.)

- 芹沢 光治良 眠られぬ夜
Бессонные ночи. (Восточное Обозрение. №8. '41. июль-сен.)
- 阿部 知二 孤独
Одиночество. (Восточное Обозрение. №6. '41. янв.-март)
- 舟橋 聖一 木石
Каменное сердце. (Восточное Обозрение. №5. '40. окт.-дек.)
- 山本 有三 不惜身命
Не щади живота. (Восточное Обозрение. №13. '42. окт. окт.-дек.)
- 岩田 豊雄 海軍
(注) ・その1、その2のみ 死亡のため中断
Флот. (Восточное Обозрение. №15, 16. '43. апр-июнь, окт.-дек.)

“Русский интеллигент в Японии (жизнь и творчество Михаила Петровича Глигорьева) Элеонора Б. Саблина “Япония ежегодник”, 1994-1995 所収。

筆者はモスクワ大学付属アジア・アフリカ大学講師。
(訳者 たきなみ ひでこ 元館員)